

授業評価が浮き彫り出す都市教養プログラムのあり方

都市教養学部経営学系経営学コース・教授
山下 英明

以下に、FD委員会と教務委員会・基礎教育部会が実施した2008年度前期における「都市教養プログラムの授業評価」[SE = 学生による授業評価、TE = 教員による授業評価]の結果概要を紹介し、都市教養プログラムに対する今後の課題を示す。

【調査対象・質問項目・回収率】

調査対象と回収率は表1の通りである。履修登録者の回収率は授業の回収率の半分以下であり、学生の授業の出席率の低さがわかる。

表1 調査対象と回収率

調査対象		回収数	回収率	
SE	履修登録者(名)	10528	5112	48.6%
	授業(クラス)	73	65	89.0%
TE	授業担当教員(名)	101	71	70.3%

表2 質問項目(SE)

問1	私はこの授業に意欲的・積極的に取り組んだ。 [態度]
問2	授業の目的を意識しながら学習することができた [意識]
問3	教員の説明はわかりやすかった [説明]
問4	教員は学生の質問・意見に対し適切に対応していた [対応]
問5	授業時間以外で一週間に平均どのくらいこの授業に関連した学習をしたか [時間]
問6	成績評価方法について十分な説明があった [成績]
問7	シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得できた [成果]
問8	私はこの授業を受講して満足した [満足]
問9	この授業の選択に当たりシラバスは役立った [シラバス]
問10	この授業の難易度はあなたにとってどうか [難易度]
問11	この授業を受講して、自分の視野が広がった [視野拡大]

また、SE [学生による評価] の質問は表2の通りである。問9以降は都市教養プログラム独自の質問項目である。本レポートで使用する略称も併せて掲げる。TEの質問項目は、SEと同一の焦点について、教員側の自己評価や、学生の態度を観察した評価を尋ねているが、ここでは主にSEの結果について報告する。回答は「強く思う・思う・どちらとも言えない・そう思わない・全くそう思わない」から選択し、順に5・4・3・2・1の点を与えた。ただし、問5は「4時間程度・3時間程度・2時間程度・1時間程度・ほぼ0時間」から、問10は「易しかった・やや易しかった・どちらとも言えない・やや難しかった・難しかった」からそれぞれ選択し、同様に5から1の点を与えた。

【学生一人一人をサンプルとした平均値】

回答内容が異なる問5 [時間] と問10 [難易度] を除き、SE [学生による評価] の回答平均は全項目で3.2以上3.8未満であった。高い順から並べると、視野拡大3.69、説明3.63、満足3.59、対応3.50、態度、成績3.36、意識3.33、成果3.24、シラバス3.23であり、この順序は前回の2007年後期の調査結果とほとんど変わらない。各項目の平均も、意識の項目で+0.10になった以外は、前回とほとんど変化していない。これまで、学生による授業評価はFD活動の中心に位置づけられてきた。しかしこの結果を見る限り、このような授業評価を毎年行うことがどれほど有意義であるのか、教員相互による授業参観など、他にFDに有効な活動はないのか、検討する時期に来ていると考える。

また、問5 [時間] には、65.7%がほぼ0時間、20.2%が1時間程度と回答し、授業に出席している学生でさえ授業時間以外ではほとんど学習していない実態がわかる。これに対し、問10 [難易度] に、難しい、またはやや難しいと回答したのは28.4%に過ぎず、都市教養プログラムの大半は、予習や復習をしなくてもそれほど難しくなく、市民講座的な授業になっていると推察する。これは単位の実質化とはかけ離れた実態であり、学生が授業以外でももっと学習し、授業内容の理解を深めるように動機づけする努力と工夫が教員に求められる。

【満足度別の平均値】

次にSE・TE双方につき、問8〔満足〕の5段階評価で1・2・3と回答した者を「満足群」、4・5と回答した者を「非満足群」とし、各々について問8以外への質問への回答平均値を比べた。

満足群は全質問に肯定的回答を、非満足群は否定的回答を寄せる傾向がある。問5〔時間〕と問10〔難易度〕を除き、SE〔学生による評価〕について満足群と非満足群の差が少ないのが〔成績〕0.74、〔対応〕0.72で、〔シラバス〕0.86、差が大きいのが〔説明〕1.16、〔視野拡大〕1.12、〔成果〕1.05であった。すなわち、学生は説明がわかりやすく、聞いているだけで知識や能力が獲得でき、自分の視野が広がる授業に満足する傾向にあり、学生も都市教養プログラムの市民講座化を望んでいるようである。

また毎回指摘されていることであるが、問10〔難易度〕については満足群と非満足群の間の差は0.35で、ほとんど差がない。つまり、授業が難解だったから不満になるという傾向はほとんどない。この点について、異論があるかもしれないが私は以下のように解釈する。学生は必ずしも安易な授業を望んでいるわけではない。むしろ、授業が安易過ぎても満足しないのかもしれない。ある程

度難しいこと、自分が今まで知らなかったことを、授業中にわかりやすく説明してくれることに満足している。しかし、聞いて理解できることと、自分で考えて初めて理解できることは自ら異なる。教員は、大学教育の最初の段階で、このことを学生に伝えなければならない。

SE〔学生による評価〕の自由記述を見ると、この解釈を確信する記述が現れる。改めて欲しいことに、成績評価におけるテストの比重が大きいこと（テストを行うこと）を挙げる学生が多く、良かった点として出席の比重が大きいこと挙げる学生が多い。また、プリントやレジュメの配布も歓迎されている。聞いているだけで楽しく、単位が取れる授業、これが今学生が求めている授業である。

【まとめ】

都市教養プログラムは、1年次生が受講することが多い。その意味で、都市教養プログラムは大学での学問修得のあり方を教育する使命を有する。教員は、授業評価を通して常に授業の内容向上に努めることはもちろんであるが、学生の授業評価に迎合することなく、学生の能力を伸ばすためにも、適正なレベルの授業を提供しなければならない。大学は市民講座ではないのである。